

2025 年度 聖学院大学

学校推薦型選抜 指定校制推薦 1 期入学試験 口頭試問課題文

◇以下の課題文について、簡潔に内容を説明できるようにしておいてください。また、課題文の内容に関して、共感したところ、共感できないところ、気がついたこと、疑問に思ったこと等について質問するので、答えられるようにしておいてください。

▶なぜ支援するのか——人は一人では生きていけない

私はもう二十年以上も夜の街を歩き続けている。昼間の喧騒が消え、静まり返った夜の間に潜り込んで息をひそめて眠る人々を訪ねるためだ。「なぜ、続けるのか」とよく聞かれる。「困窮者を支援するため」。確かにそうなのだが……。

「なぜ、困窮者を支援するのか」。私は、この問い自体にたじろぐ。質問者に問い返したい。「なぜ、そんなことを問わねばならないのか」と。「困窮者を支援することに、理由が必要か」と。この質問の根っこには、困窮は自業自得であり、助ける必要などないという現代社会の掟が見え隠れする。あえて答えるならば、こう言いたい。「それが人間だからだ」「それが社会だからだ」

なぜ、そう答えるのか。それは「人は一人では生きていけない」からだ。野宿者であろうが、富裕層であろうが同じこと。この事実からは誰も自由ではない。私も、野宿者も、同じ現実を生きている。どちらも誰かを必要としている。「自己責任だ」ですますなら、社会も国家も不要となる。

確かに私も当初、「かわいそうな野宿者」を助けようとしていた。だが、今は違う。なぜなら、私自身が「一人では生きていけない」人間だとつくづく思うからだ。夜の街を訪ねるのは、その根底に私自身が一人では生きていけないという現実があるからだ。「自分のため」と言われればそうかもしれない。でも、この弱さを認めない支援者は、実に厄介な存在だ。弱さを踏まえない支援者は、結局自分も相手も傷つける。「私は一人では生きていけない」。この事実にもまず立つことが肝心なのだ。

『旧約聖書』の天地創造物語において、神が最初の人間「アダム」を造られた時、神は「人がひとりではいるのは良くない」（『創世記』二章一八節）と言われた。これが聖書を貫く人間の現実だ。キリスト教はこの理解の上に立っている。私は、この事実を検証するため、天地創造以来の人間であることを確かめるために、路上の隣人を訪ねている。

（中略）

▶他者からの言葉——「きっと笑える時がくる」

震災*から三週間目に被災地に入った。三月末の石巻港一帯はいまだ目を覆う惨状であった。私は、牡鹿半島にある 蛤 浜、折 浜 という漁村集落へと向かっていた。崩れた家屋はそのままだった。集落を訪れた時、迎えてくださったのが亀山区長夫妻だった。既に支援物資が届いていたこともあり、ご夫妻は私を笑顔で迎えてくださった。「この村には行政やボランティアは来ていないんですか」と質問すると、「来ていません。でも、他のところはもっと大変だから」と答えられた。「この人と一緒に歩んで行こう」と思えた一言だった。家も船も牡蠣の養殖いかだも流された。栈橋は崩れ、港一帯が地盤沈下していた。復興が困難であることは誰の目にも明らかだった。

その時、亀山夫妻が支援物資に添えられていた一通の絵手紙を見せてくれた。手紙には、クリスマスローズの絵と共に、「生きていれば きっと笑える時がくる」と書かれていた。夫妻は涙をためながら、「私たちは、今回の津波で全てを失いました。でも、今日はこれで生かされているんです」と語られた。

極限状況においてなお人を生かすものは何か。食物、家、服、お金が必要であることは、ホームレス支援においても最優先の事柄だ。しかしあの日、あの集落の人々を支えたのは、きっと笑える時が来るという「他者の言葉」であった。「笑えない時」が突如私たちを襲う。確かに「言葉」では腹は満たせない。だが、食べ物があつたとしても「食べよう」と思えるか、「生きよう」と思えるかが問われていた。日ごろは「あれもあつたらいい、これもあつたらいい」と思っている。しかし、極限状況では「なくてはならぬもの」が問われる。あの日、人々をもう一度立ち上がらせたのは、「他者の言葉」だったのだ。私は以来、あの手紙の意味を考えている。三月十一日以後を生きる者として、それを考えることが義務だと思っている。

▶相互多重型支援——笑える牡蠣プロジェクト

数ヶ月が経った時、亀山さんの言葉に驚いた。「沢山の支援を受けて本当にありがたかった。でも、もうお断りしようと思う。いただき続けるのは重い。何のお返しもできないのがつらいから。助ける側と助けられる側の固定化が起こっていた。助ける人は常に「どうぞ」と言う。どこかで「よいことをしている」と思っている分、総じて元氣。しかし助けられる側は、いつも「ありがとう、すみません」と言われる。「ありがとう」と言われることはない。助けられればなしの日々は、これまで自分の腕一本で生きてきた漁師たちには、ありがたくも、実につらい日々であった。

いざという時に助けてくれる人がいることは、本当にありがたいことだ。誰かが助けてくれることは、自分が大切にされている 証 である。助けられる時、人は自尊感情を持つこと

ができる。しかし、それだけでは「つらい」のだ。

あの絆ブームは、まさに「元気な人が、かわいそうな人を助ける」ということであったように思う。多くの場所で、「ありがたいが、つらい」ということが起こっていたのではない。もちろん、あの状況においては助けが来ること自体に大きな意味があった。無縁社会といわれた日本で、支援の輪が一気に広がったことは素晴らしい。だが、それだけで「絆」と言うのは早計ではないか。「絆」は相互性を持つ概念だ。助けられた人が誰かを助けることができる。それが開かれた絆であり、相互性が担保された絆である。孤立無援の時に助けられ、人は元気になる。さらに、自分に役割があること、つまり使命を担うことによってもっと元気になる。それが「自己有用感」である。「絆」というのは「自尊感情」と「自己有用感」の融合なのだ。

これは野宿者支援の現場においても、繰り返し確認してきた事柄だ。「絆」は相互的であり、また可変的でなければならない。すなわち「助けられた人が助ける人になれる」という変化を担保していなければならない。あるいは、「絆」は同時的であってもいい。「助けられつつ助けている」。それは素敵なことだ。絆ブームは、どうも一方的だったように思える。

悩んだ末、ある提案をした。「相互多重型支援」だ。仰々しい名称だが、中身は単純だ。私たちはまず牡蠣養殖に必要な部材を漁師さんに提供し、支援を行う。その結果、牡蠣養殖は現在では震災前の規模に戻った。それだけなら単なる一方的な支援なのだが、牡蠣ができた時点でそれを販売することにした。殻つきの加熱用牡蠣の販売だ。漁師が育てた牡蠣を、加工場で洗浄、箱詰めして出荷する。この仕事を担うのが、元ホームレスの若者たち。漁師は支援を受けて自らの復興のために努力すると同時に、困窮青年の自立を支援する。困窮青年たちは、自らの自立を目指すと共に被災地の復興を支援する。助けられた人が、助ける人になる。助けられながら、誰かを助ける。そのような相互性の中でプロジェクトは進んでいく。一方、牡蠣を食べる人は、震災復興支援と困窮者支援が同時にできる。牡蠣を食べること自体が社会参加であり、使命を得ることとなる。まさに、一粒で二度おいしい牡蠣である。一つのものに多重の意味が伴う。これが「相互多重型支援」である。

プロジェクトが進む中で、別の漁師からこんな話も聞いた。「このあたりの漁村の多くは、津波が来なかったとしても十年後には廃村になっていたと思う。だから単に復興させてもダメだ」。東北の農業も畜産も漁業も後継者問題を抱えていた。この問題は、震災によって一層拍車がかかった感がある。だからこそ「相互多重型支援」を通じて、多くの若者が漁業の現場と出会えたらと期待する。百人に一人、いや千人に一人でも「漁師になりたい」と言い出す青年が現れることを期待する。まさに「一粒で三度おいしい牡蠣」となるように祈っている。

牡蠣は「笑える牡蠣」と命名した。あの絵手紙の言葉をいただいた。「生きていればきっと笑える時がくる」。あれから二年が経ち、瓦礫は片づけられた。何も無い風景が広がっている被災地。失われたものは返ってこない。しかし、一方で震災前にはなかった風景が確実に広がりつつある。震災がなければ出会うことはなかった路上の青年たちが、浜の加工場で

漁師と共に働く。生きていれば必ず出会える。漁師は再び笑い始めた。青年たちも笑っている。そして食べる人もきっと笑える。そんな牡蠣の出荷が始まっている。笑うことを忘れた人々に届けたいと思っている。

「笑える牡蠣」は、二〇一三年四月から二ヵ月間、試験的に販売された。期間中、約一千箱が出荷された。このプロジェクトは、現在、NPO法人「ホームレス支援全国ネットワーク」と「生活クラブ生協」「グリーンコープ共同体」が母体となり結成された「公益財団法人 共生地域創造財団」によって担われている。漁師五名、青年四名が従事。二〇一三年十月より一般向けの販売が始まる。乞う、ご期待。



「笑える牡蠣」出荷準備風景

*本文中で取り上げられている「震災」は、「東日本大震災」（二〇一一年三月十一日）のことである。

奥田知志・茂木健一郎『「助けて」と言える国へー人と社会をつなぐ』（集英社新書 2013 年）